川崎病における血清総胆汁酸の検討

（分担研究：川崎病のサーベイランスに関する研究）

加藤裕久，井上　治，木村昭彦，佐藤　登，杉村　徹，
福田　毅

要約：川崎病急性期患者55例の血清総胆汁酸を検討した。このうち27例については回復期についても測定し，その経過を観察した。急性期（平均６病日）は20／55(36％)で血清総胆汁酸が高値を示したが，回復期（平均36病日）では１例のみ（3.7％）が高値を示した。冠状動脈病変の出現と血清総胆汁酸の異常との間には相関はなかった。川崎病急性期の血清総胆汁酸と血清総ビリルビン，ＧＯＴ，ＧＰＴおよびアルカリフォスファターゼとの間に相関関係が認められた。

見出し語：川崎病，血清総胆汁酸，肝機能，冠状動脈病変

【目的】川崎病急性期の約20％に肝機能障害が，また約10％に胆嚢腫大が生じる。一方胆汁鬱滞の指標のひとつに血清総胆汁酸がある。これまで川崎病患児で血清総胆汁酸を検討した報告はない。そこで川崎病急性期および回復期での血清総胆汁酸を測定し，冠状動脈病変の出現や肝機能障害との関連を検討した。

【対象と方法】当科で経過観察した川崎病55例（男児；35例，女児20例）を対象とした。川崎病の発病時年齢は２カ月から8.9歳(平均1.9歳）である。検体採取病日は急性期３−8病日(平均６病日）で，このうち27例は11−82病日（平均35病日）の回復期にも検討した。酵素法にて血清総胆汁酸を測定した。また同時に血清総ビリルビン，血清ＧＯＴ，血清ＧＰＴおよび血清アルカリフォスファターゼを測定した。血清総胆汁酸は15μmol／１以上を高値とした。

【結果】川崎病急性期に測定した55例中20例（36％）が血清総胆汁酸の高値を示した。回復期では27例中１例（3.7％）に血清総胆汁酸の高値を認めたが，この症例は急性期に異常高値を示した例であった。川崎病急性期は回復期に比べて有意に血清総胆汁酸高値例が多かった。（$p=0.0013$）。

27例の急性期と回復期のペア血清での検討では21例が回復期に血清総胆汁酸は低下しており，特に急性期に高値であった14例は１例をのぞいて正

久留米大学医学部小児科；Department of Pediatrics, Kurume University School of Medicine

常域へ回復していた。（図１）

血清総胆汁酸と冠状動脈病変との検討では両者間に有意の相関関係は認めなかった。

急性期の血清総胆汁酸と血清総ビリルビンとの検討では有意の相関関係を認めた。(図２）　しかし一部の例では血清総ビリルビンが正常でも総胆汁酸が高い値を示す例が存在し，特に軽度上昇例では血清総ビリルビンが上昇しない例が多かった。

急性期の血清総胆汁酸と血清ＧＯＴとの検討でも有意の相関関係を認めた。(図３）　血清総胆汁酸が異常に高い値を示す例の中に血清ＧＯＴが正常である例も存在した。同様に血清総胆汁酸と血清ＧＰＴおよび血清アルカリフォスファターゼとの間にも弱いながら相関関係が存在した。（図４，５）

【まとめ】川崎病患児の血清総胆汁酸を検討した。急性期には36％が高値を示し，回復期にはそのほとんどが正常化した。冠状動脈病変出現の予知因子にはならなかった。急性期の血清総胆汁酸は血清総ビリルビン，ＧＯＴ，ＧＰＴおよびアルカリフォスファターゼと相関を認めたが，一部の例ではこれらの異常を伴っていなくても血清総胆汁酸が上昇している例が存在し，subclinical な胆汁鬱滞がある可能性が示唆される。

図１　川崎病 急性期と 回復期で の胆汁酸 の推移

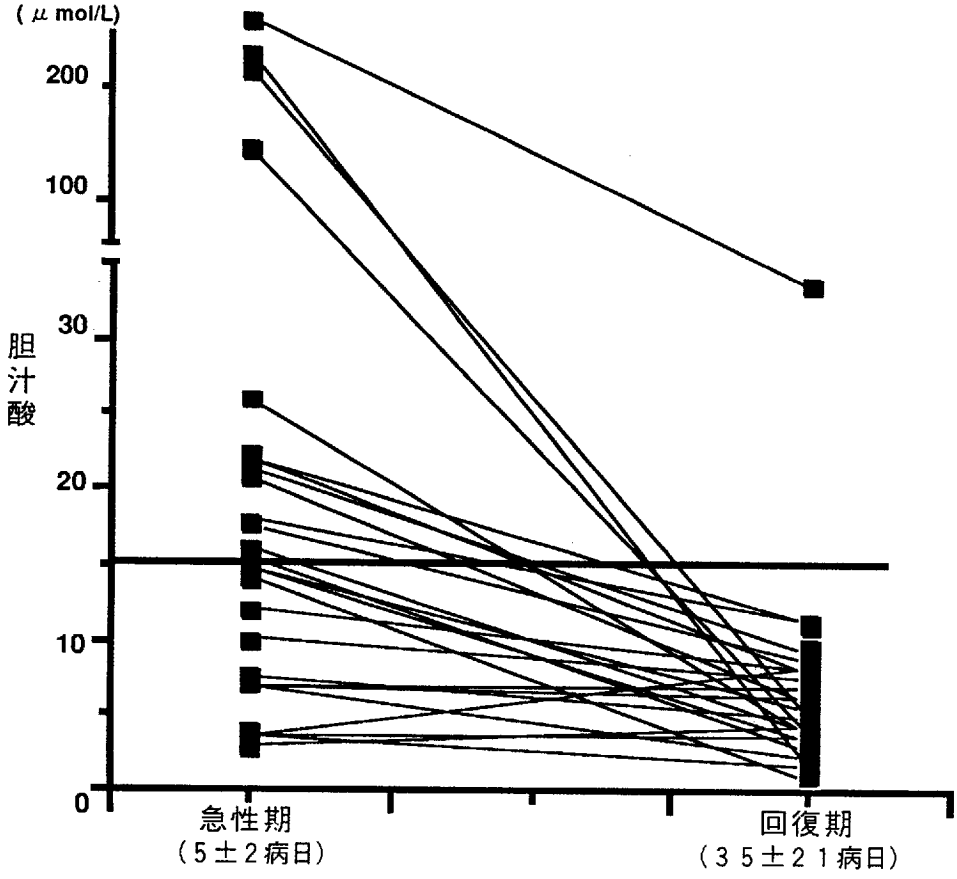


図２　急性期の総胆汁酸と総ビリルビン

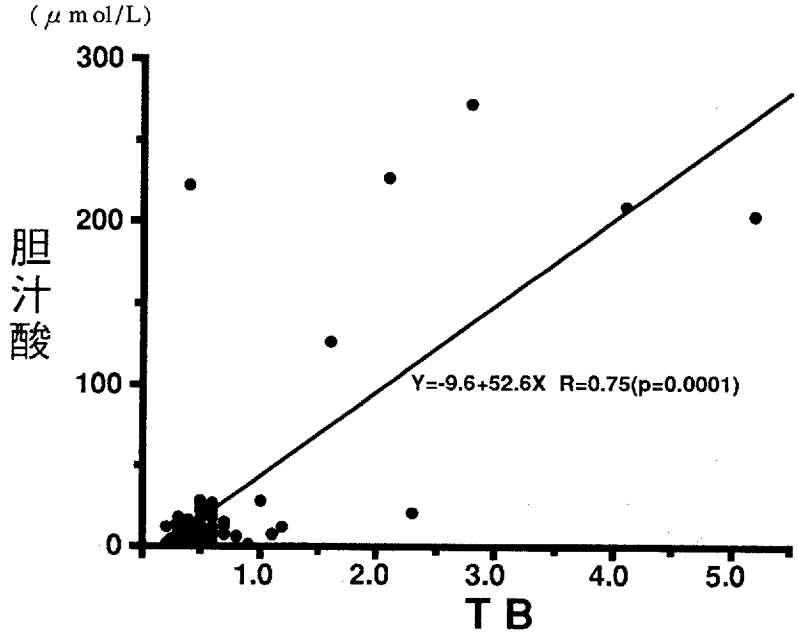


図３　急性期の血清総胆汁酸とGOT

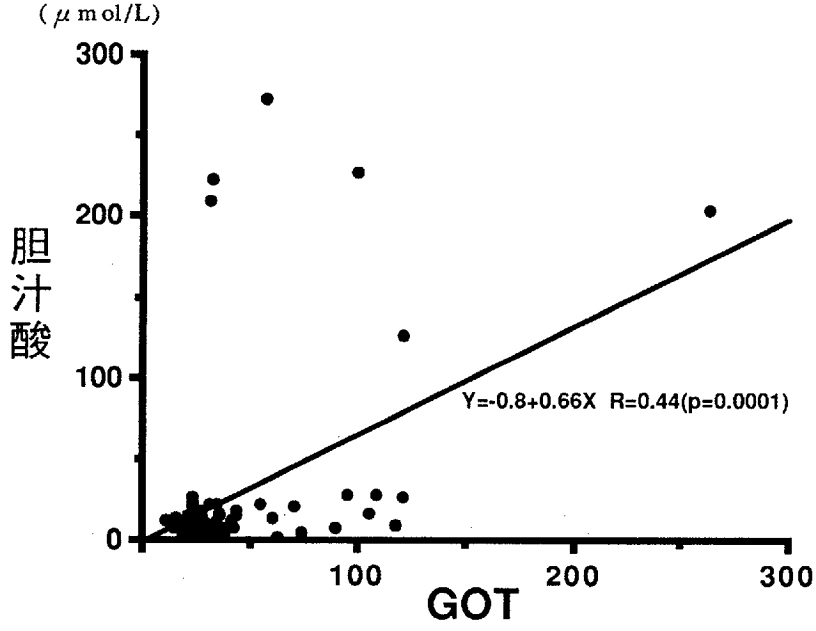


図４　急性期の血清総胆汁酸とGPT

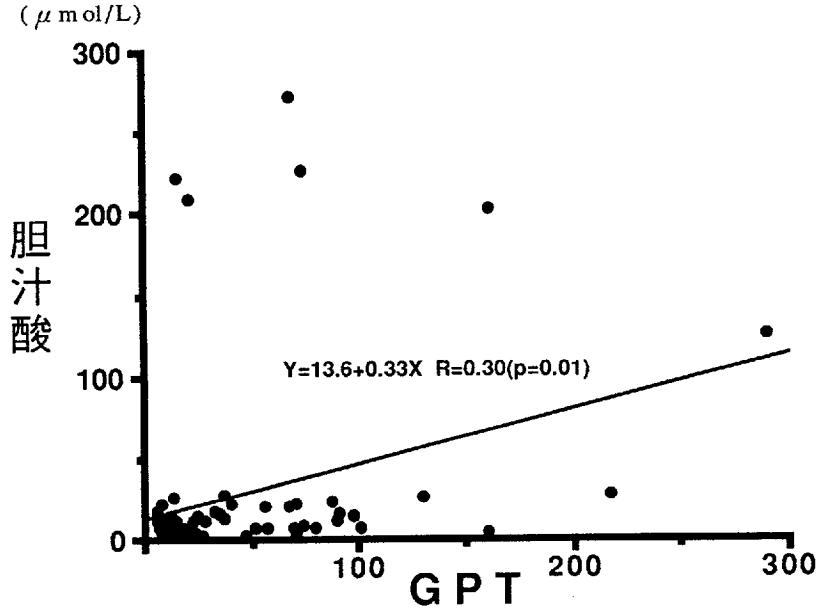
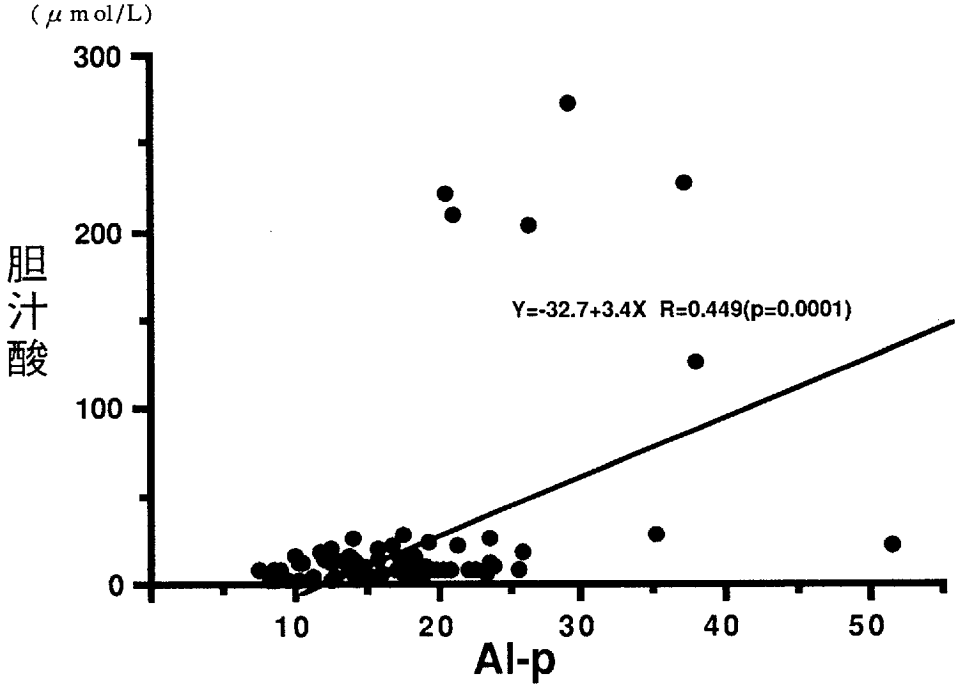


図５　急性期の血清総胆汁酸とAlp



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

要約:川崎病急性期患者 55 例の血清総胆汁酸を検討した。このうち 27 例については回復期についても測定し、その経過を観察した。急性期(平均 6 病日)は 20/55(36%)で血清総胆汁酸が高値を示したが,回復期(平均 36 病日)では 1 例のみ(3.7%)が高値を示した。冠状動脈病変の出現と血清総胆汁酸の異常との間には相関はなかった。川崎病急性期の血清総胆汁酸と血清総ビリルビン,GOT,GPT およびアルカリフォスファターゼとの間に相関関係が認められた。